

調査票作成における諸問題

社会調査の基本過程

井 垣 章 一

質問調査によつて得られた回答が、事実の間違いのない正しい情報であるとは必ずしも云い切れない。このことは、ただ単に、難かしい問題を取扱つた質問の回答にのみ限るものではない。われわれがその回答の正当性を全く自明のものとして、いささかも疑わなかつた極めて簡単な事実に關する質問についても、それは等しく同様である。

G. L. Palmer のフィラデルフィアにおける研究は、職業や教育に關する諸項目にかなりの回答誤差がみられ、なお年齢の如き、その屬性が最も客観的であり、従つて最も明確、簡潔に事實把握が可能と考えられているものですら、やはりその例外ではなかつたことを明らかにした。⁽¹⁾ また W. P. Mauldin & E. S. Marks は、年齢とか職業とか又耕作面積とか家畜数とかいうような枚挙的調査 (enumerative survey) が取扱う、こうした簡単な事実に關する質問項目にも、回答誤差は決してとるにたらないものではないことを指摘した。そして彼等によれば、調査に含まれる殆どあらゆる項目に、ある誤差が存すると推定してよいのである。⁽²⁾

さて、絶対的な精度は望むべくもないが、減少し得る限りのすべての誤差を排除し有効な精度にまで高めることは、

調査表作成における諸問題

社会調査を企図するものの不可欠な要件である。即ち、ひたすら正確なデータの獲得を目指す社会調査の学徒にとつて、もし前述の専柄が事実とすれば、それはまさに大問題としなければならぬであろう。にもかかわらず、この問題は、かつてはむしろ看過されていたといえる。Mauldin & Marks が指摘するように、それは従来の統計学が、どちらかと云えば、むしろデータ蒐集後の分析に力を注ぎ、データ蒐集方法の問題を余りかえりみなかつたからである。かかる認識に到達した以上、今こそ社会調査は、従来の如くただ単に「回答の獲得」(getting an answer)ではなくて「正確な回答の獲得」(getting a correct answer)に、ますます強調点がおかれねばならないであろう。⁽³⁾ また W. E. Dening は、入念な計画と考慮なく蒐集されたデータを、殆ど疑うことなしに正確なものだと思ひこむ用意を非難し、この回答誤差を筆頭に、データ蒐集の技術的手段の差異、面接員によるバイアス、抽出誤差、分析過程や解釈における誤差、等々計十三に及ぶ誤差を招く因子が存在しており、故に、調査を計画するにあつては、常にその全部について充分考慮しなければならないと述べている。また、この Dening が就中強調したのも、やはりこの回答誤差の問題であつたことに注目しなければならない。それは、他の十二に比べてかなり多くの頁をその分野に与えていることに充分うかがわれ、また彼が、「かつてサンプリング・エラーやサンプリング・バイアスの理論を必要としたのと全く同じく、回答におけるバイアスやヴェリアビリティについて用いられる理論が必要である」こと、これによつて社会調査の学徒に「新しい有用な領域」(new realms of usefulness)が開かれる、と述べているところに端的に示されている。⁽⁴⁾

さて、それでは、この回答誤差は何によつて現われ、また、如何にして排除することが出来るのであろうか。われわれはこの問題に含まれる数々の問題点を Mauldin & Marks にならつて、調査者が意図する質問の意味が、調査票や面接員を経て回答者に正しく伝達され、代つて今度は、回答者の回答が歪められることなく、逆のコースを経て調査

者に伝達され、その分析集計を経て他の人々に報告されるというコミュニケーションの問題と、回答者が事実を正確に想起しえず、自然誤つた回答に陥る記憶 (recall) の作用の問題とに包摂して、これを考えることが出来る。云い換えれば、この問題は、質問はどのように行い、調査票はどのように作成したらよいかということになる。かくて、この小論の目的は、回答誤差は質問の技術によつて減少されるべきものであること、即ち調査票の作成をめぐつて、データ蒐集手続の理論と技術とを明らかにするにある。

(1) W. Edward Deming, "On Errors in Surveys" in *American Sociological Review*, 1944, Aug., p. 361.

(2) W. Parker Mauldin & Eli S. Marks, "Problems of Response in Enumerative Surveys" in *American Sociological Review*, 1950, Oct., p. 649.

(3) *Ibid.*, p. 657.

(4) *Ibid.*, p. 360.

二

回答誤差は多く調査票の不備に基因するものと考えることが出来る。一つの測定用具として調査票は、理想的には、それが測定しようとするものを真に測定するものでなければならぬ。即ち、それによつて獲得せられた回答は、何等他の因子によつて歪められることなく、測定せんとしている標識に関して、諸個人間の真実の相違を反映するものでなくてはならない。⁽¹⁾

かくて調査票に含まれる個々の質問は、各々それが意図する回答を正確に引出さねばならないとともに、その全体はわれわれが究明しようとしている問題にとつて、有意義な情報を与えるものでなければならぬ。このことは、調査票

の作成が単に質問や用語の配置技術の問題ではなく、調査しようとする問題は何かという社会調査のそもその第一段階に深く結びついた問題であることを示している。ここに、「よき調査票は入念に研究されたよき仮説から生まれる」と述べた W. J. Goode & P. K. Hatt の主張は、明かに、この関連性を最も端的に云い表わしたものと云えよう。次にわれわれは、問題の選定から調査票作成に至る大体の経過を検討することによつて両者の関連性をまず明らかにしたい。

さて、どんなことを調査するか、即ち調査トピックの選定は主に調査者の個人的関心にたよつており、往々科学的考慮以外のものによつて決定されると云える。しかし問題は、このトピックを調査計画 (research project) に組み入れることにあるのであつて M. Jahoda, M. Deutsch & S. W. Cook 等がこれを「科学的探究における第一段階」と称しているように、この操作は既にすぐれて科学的と云わねばならない。即ち、仮説の形成であつて、仮説の機能は「諸現象間の特殊な関係を、その関係が実験的にテストされ得るが如き様式において述べること」である。⁽⁴⁾ さて、われわれがとりあげようとする問題が、厳密な一連の科学的用語によつて規定され明示されるべきとき、その問題解明には如何なる情報または如何なるデータを必要とするかが始めて明らかになる。そしてこれに基づいてのみ、如何なる項目または質問を組み入れるべきかが始めて検討され得るのである。質問項目の側から云えば、このことは、各項目がまぎれもなくわれわれが研究しようとしている問題に結びついており、それに対して有意義な回答を期待できるものでなければならぬ。これに関して Dening は、研究問題に対する明確な知識と分析の計画をもたず、ただその研究問題にどうにか関連した質問をたて、回答を引出す無意義を指摘しており、⁽⁵⁾ また G. A. Lundberg は「その情報はどのようにに出来るのか、研究目的に何を寄与するか、と云う点について明瞭且つ厳密な考を先ずもたないでは、一つの項目といえども決して入れてはならない」と主張している。⁽⁶⁾ 更に Goode & Hatt もこれを「諸項目の中心問題への関連性」と云

う言葉で表わし、調査票作成において基本的に考慮すべき要件として就中強調している。即ち、「ここに調査者が留意しなければならぬ重要な事柄は、調査票におけるあらゆる項目が、理想的には、仮説または仮説の一部そのものを構成するという事である。調査票に入れるあらゆる項目はすべて、調査者が中心問題にとつて有意義な回答を論理的に期待出来るという根拠においてのみ擁護し得る。これは明らかに彼が調査する領域についての出来る限り充分な知識を要する」と。それでは、調査トピックが決定し、仮説が形成せられ、必要なデータの種類が明らかにされることによつて、価値ある項目と無い項目とがふり分けられ、最後に使用出来る形に調査票がまとまるまで、具体的にはどのような過程を辿るのであろうか。以下われわれはこれを Goode & Hatt の論述に従つてその大要を明らかにすることにしよう。

彼等はこの過程を、調査者自身の着想から、所要の人々との意見交換等を経て、予備調査に至る「内」から外への進「行」(moving from the "inside" outward) という形で考えた。即ち、先ず調査者は研究問題の論理的含蓄を試行的に計画し、次にこれに関連する質問について、自分の経験を思い合せたり、文献を検討したり、更に協力者と相談討論したりする。このような過程によつて、調査者は、極く大ざっぱな質問項目のリストから始めて、次々と多くの質問項目を獲得してゆき、不完全な点を次第に改正して行く。かかる質問の予備リストの作成により調査者は、自己及びその協力者から更に外へ向う準備が出来たのである。次の段階は、このリストをその研究分野と、それに関連する諸分野との専門家に提出して必要な改正を行い、調査票の各部分間に一層緊密な論理的関連を發展させることである。しかしこの段階では、まだ調査者にとつて、何が自分の研究問題の決定的エレメントであるかがぼんやりと分つたにすぎない。調査者は更にフィールドに直接出かけて行き、どんな項目を入れ、文献が不備な領域の場合には項目はどのように作成したらよいか、実態に即して検討しなければならぬ。この場合、研究される社会的行動を最も身近に経験している人々との、多くの柔軟性に富む探索的な面接 (unstructured exploratory interview) を行うことが必要である。ほぼ

調査票作成における諸問題

完成に近い調査票がやがて作成されるであろう。それには更にプリテストを行うことによつて、質問が意図された様式において理解され、答えられるかどうかを見究めなければならない。例えば「わからない」と云う回答が多い場合、質問が難しすぎるのか、言葉使いが曖昧なのか、云い方がまずいのか、回答者がそもそもかかる情報をもっていないのか、また面接を拒否したり、質問紙を返送しなかつたりしたのはどうしてか等々詳細な検討を行い、種々改正の結果、最終的な調査票が完成されるのである。⁽⁸⁾

ここに附記せねばならないのは、たとえ如何に入念に仮説や必要な項目が前もつて研究されたとしても、必ず実際に當つて照合 (empirical checking) を行わねばならぬこと、及び調査トピックの選択から本調査に至るまで、調査過程 (research process) は Jahoda 等が主張するように、前後に循環的に交錯し合う有機的な関連を形成するという⁽⁹⁾ ことである。即ち調査過程とは、一段階が終つて始めて次の段階が開始される種類のものでなく、先の段階は次のまた、その次の段階を既にその内部に予想し含んでいるのである。かくて、後の段階は先の段階の再検討に導くことも往々起り得るであろう。実際に當つてみれば、予想されない問題が発見されるかもしれないし、作成された仮説が全く不適切であることが分るかもしれない。かくて調査票の予備調査そのものも、問題を提示し仮説を確定し項目の選定を考慮する第一段階と決して離れたものでなく、むしろその今一つの側面と考えることが出来よう。

かくて理想的な調査票は、緻密な理論的研究と入念な予備調査との相互関連的な検討を経てのみ始めて完成されるものなのである。

ここに使用される「調査票」という用語は厳密な意味での Schedule のみに限らず、Questionnaire (質問紙) や Interview Guide (面接手引) をも包括している。厳密な意味では、Questionnaire は回答者自身が書きこむことによつて質問回答が得られる仕組のものであり、Schedule は回答者との面接状況において、面接員が質問回答を書きこむものであり、Interview Guide とは面

接員をとりかへばはなすなむとマンナ、又はカビニクのリマナであるにせられた。(Goode & Hatt, op. cit., p. 133) 前二書は多
くの如く、察し察問の言葉が全回答者に対して統一されておらず、似ており、最後のものは面接員の問ひ方にならりの柔軟性が許さ
れるところも如く、それと異なっている。かようなことは、これはその使用法と形態を異にするものであるが、文字にせよ言葉にせよ、質
問がなされる回答者の言葉の上の報告 (Verbal report) に類する等しく共通なものであり、故にこれら一組の質問を「便宜上」「調
査票」と呼んでおることにする。

- (1) Marie Jahoda, Morton Deutsch & Stuart W. Cook, "Research Methods in Social Relations; With Especial Reference to Prejudice, Part one; Basic Process," 1951, chap. 4.
- (2) William J. Goode & Paul K. Hatt, "Methods in Social Research" 1952, p. 135.
- (3) *ibid.*, p. 17.
- (4) Goode & Hatt, op. cit., p. 74.
- (5) Deming, op. cit., p. 364.
- (6) George A. Lundberg, "Social Research" 1942, 福武・安田訳「社会調査」一八七頁
- (7) Goode & Hatt, op. cit., p. 135.
- (8) Goode & Hatt, op. cit., pp. 135—36, pp. 145—47.
- (9) Jahoda, Deutsch & Cook, op. cit., Chap. 1.

III

以上において、われわれは調査票に組み入れられる質問項目が、どのように選定されるかという調査票作成の根本的
基礎を明かにし得たと思う。次の問題は、しからばこれら質問項目の一つ一つが実際どのような形で問われたらよい

調査票作成における諸問題

かという、いわば質問の技術の問題である。

しかしこの問題に直接移る前に、先ず、次の如き事柄に注目する必要がある。それは、質問を行い回答を得るこうした調査方法が、究極的には、回答者の言葉の上の報告 (verbal report) に頼らなければならないということである。そもそも、質問による調査方法は、「人が何を体験し、信じ、期待し、感じ、欲し、意図し、為しており、為したか、に關する及びその説明もしくは理由に關する情報を獲得するのに特に適している」とされて⁽¹⁾いる。しかし人があることをしたというとき、本当にしたのか、またあることに反対だというとき、本当にそうなのか、これらをどのようにして確証したらよいのであるうか。かくてこの問題の解決には、言語行動 (verbal behavior) が現実の行動、態度にマッチするものであるかどうかの、久しい論争にまで遡らねばならないであろうか。しかしこの場合、彼の回答は間違いなく本当だと云えないのと全く同じく、必ず偽りであるとも云い切れないことを知れば、この解決はそう困難なことではないであろう。即ちわれわれは、日常の生活経験の中に、充分豊富にその例証を見出すことが出来るのである。即ち、日常行動において言語行動の妥当性はその有用性によつて証明されている。例えば、われわれが友人に、ある遊びについてどう考えるかを問ひ、彼が「危険だ」と答えれば、彼の感情のこのような表明は正しいと信じてよい理由が存する。即ちわれわれは、ある推論を補うことによつて、彼はその遊びを友人に奨めはしないと云う予測をたてる事が出来るからである。⁽²⁾とにかく、われわれは日常生活において、言葉の上の報告に大いに頼つてゐることは事実である。人は敢えて偽りを云おうとするものでない。偽るには偽る理由があるはずである。あらゆる行動はすべて特定の情況に關連して起り、行動は常に特定の情況に關連して予測されるものである。偽りの報告も特定の情況に結びつけてこれを理解し予測することが出来る。真実を云うのをはばかる、恥かしい、又自分に不利だと感じとる場合、事実を歪めたり自分に有利なように報告しようとするだろう。また、ある事情の下では、自分の云うことに悦に入つたり、相手を感心さ

せてみたりしたい動機がはたらき、回答の色づけが行われるであろう。

以上のように考えてみると、よく云われているように、「言語は行為に比して皮相的であり当にならないものである」とは決して云いすぎることは出来ない。この見解は Jahoda 等も指摘するように「言語が真実の態度を歪めたり隠したり出来るように、行為もまた全く等しくそうだ⁽³⁾」と云うことによつて簡単に否定することが出来る。だから、問題は「その行動が言語行動であるか、それともそうでない (nonverbal) 行動であるかどうかではなく、その言語や行為が、社会的圧力が存するかそれとも存しないか何れの情況の下に起つているか⁽⁴⁾」と云うことなのである。

面接員によつて質問が行われるという情況も、回答者に対して恐らくある社会的圧力を含むものである。かくてわれわれは、以上の如き行動理論に基づいて、対象者が回答する情況の特質を知ることにより、回答を評価し得ることを学ぶと共に、また一方、行動に誘導する質問については、次第に詳述するように、一般的な漠然とした質問よりも、常に、特殊な情況に関連した行動、それ故に特殊な質問をたてることの重要性を知ることが出来るのである。

ともあれ、言語行動は情況に結びついて理解される限り、その理解を誤らないということであつた。報告を偽つたり真実を蔽つたりしようとする動機は、常に誘発されるのでなく、常に特定の情況に結びついているのである。さてこの際、率直に答えたくとも、適切に答え得ない場合が往々起り得ることについて、一瞥しておく必要がある。遠い昔の事はなかなか正確には思い起せないものであるし、また、たとえ自分に現に体験されているとしても、多くの人々にとつては、たとえば、ある複雑な社会的態度の如く、適切な言葉でうまくまとめて報告するには、なかなかむづかしいものもある。何を感じ、何を欲し、何を意図しているかは、質問することによつて明らかにせられるはずであるが、精神分析学者達が示すように、われわれの重要な信条、動機の多くは近ずき難く無意識なのであつて、それはただ複雑な推論を経てのみ知的に理解することが出来る、言葉の形 (verbal form) で自身に明らかにされるのである。だからこの場合、

不用意に問えば「わからない」とか、また云いはしても往々誤つているか、少くともわれわれが求めようとした型にない回答を得るにすぎないであろう。即ち、回答者が事実を正しく報ずるつもりで報告したものが、回答者に「真実」であっても「事実」でないと言うことが起り得るのである。⁽⁶⁾とにかく、数知れない多様な内容を含む人間行動の領域に秩序を描いてみせる人間行動の科学は、故に、質問の作成に多くの根本的示唆を与えるものと云うことが出来るであろう。これによつてわれわれは、回答者にとつて、普通では事実上報告が困難な事柄にしる、或いは人に云いたくない事柄にしる、質問の技術によつて、充分正確な回答を引出すことが出来るのである。しからば、それは実際どのような事柄なのであろうか。しかし、この問題に進む前に、われわれは、最初の章において強調しておいたことをここで今一度、想起する必要がある。それは、疑う余地のない極めて簡単な事柄に対する質問においてすら、その回答誤差は決して取るに足らぬものでないという事実である。これに関連して、A. Kornhauser は次のように云つている。「調査票における最も厄介な誤差は……『明白に単純な』質問においても、知らないうちに出てくるものである」と。⁽⁷⁾われわれは多くの考慮を払わずに不用意に質問を行つていないであろうか、しかもその回答を、直ちに正しいものと思ひ込んでしまう大きな誤ちを犯していないであろうか、これらは質問を作成するに當つて、最も考慮を要すべき重要な点なのである。

(1) Jahoda, Deutsch & Cook, op. cit., p. 160.

(2) *ibid.*, p. 153.

(3) *ibid.*, p. 114.

(4) *ibid.*, p. 114.

(5) *ibid.*, pp. 154-55.

(6) Goode & Hart, op. cit., pp. 161-62.

(7) Arthur Kornhauser, "Constructing Questionnaires and Interview Schedules" in "Research Methods in Social Relations; with Especial Reference to Prejudice, Part two; Selected Techniques" p. 431.

四

R. I. Ackoff は、調査票の作成に関する一般的規準は、未だ存しないと云っている。⁽¹⁾しかし、人間行動に関する科学の発達と、数多くの質問調査の経験と、その批判検討は、調査票の作成に関して根本的な指針を与えるかなりの資料を提供してくれる。Jahoda 等は事実、信条、感情、行動規準、現在及び過去の行動、及び以上のものに対する理由等、質問内容の形態の相違による分類によつて、質問のたて方をまとめあげた。また Kornhauser は、調査票作成に当り考慮すべき諸点の詳細なりストを作りあげている。われわれは以下、主としてこれ等を参照して、最も基本的な問題を新たにまとめ直しながら考察することにならう。

回答者はたとえ問われている情報を持っていなくとも、従つて答える術を全く持たないにもかかわらず、何とか回答しようとする傾向を持つ。故に、回答者が間違いなくその情報を持つているかを前以つて入念に検討し、また調査票には回答の真偽を確める質問を組み入れることが必要である。

Kornhauser は、あるストライキに関する世論調査で、回答した者の半数以上が、そのストライキ自体をよく知らなかつたことを発見した。また、米国の社会保障制度は、英国のものに比べてよいかよくないかという質問では、殆どの人々が、英国がかかる制度を持つていることすら知らなかつたことが明らかになされた。ここに重要なことは、同じく彼の指摘するように、「人々がその情報を持つているかどうかを先ず問うていない同様な型の質問において、殆どすべて

の個人は、自分が情報をもつていないにもかかわらず意見を表す」と云うことである。⁽²⁾これに関して、また Goode & Hatt も「回答者は往々全然知らない事柄でも答えたりする」と云い、更に Denning も、主婦は知らないにもかかわらず、何とか答える傾向があることを指摘している。⁽³⁾この場合調査票に記録せられたものは、ある質問に対して回答者がこのような反応をしたというに留まっている。⁽⁴⁾それは決してわれわれが求めようとする情報でないことはいうまでもない。かつて写真機を買おうとか、欲しいとかいう気を全く起したことの無い人に、適当な選択肢 (alternative) のリストを示しながら「新しくお買いになる場合、特に考慮される点は……」と問うても、回答は得られるかもしれないがこの市場調査は、全く誤つた結果に陥つてしまふであらう。

故に、この誤ちに陥らないためには、対象者が問われている情報をもつているかどうかを前以て十分に検討しておくことである。Ackoff は、現実から遊離した、単に推定に基づいて作成せられた調査票の無益さを指摘し、調査票を用いるときは、必ず出来る限りかかる推定 (人が求める情報をもつていと云う推定) の正当性を検証するよう、留意しなければならぬとしている。⁽⁵⁾また A. M. Lee は、世論調査において、回答者が意見を求められる問題が、往々調査者自身の関心や推定等、アプリオリな基礎において選択され、大衆の真にもつものから遠ざかることにより、「わからない」とか、誤つた回答が多く出ることになつてしまふ、だから現実の問題にされており一般に討議されている問題を選ぶことが必要であり、この為には適切な予備調査を行うべきだとしている。⁽⁶⁾

さて、このような予備調査による外に、以上みたような質問に対する反応傾向が生む誤差は、適当な質問の操作によつても、また回避することが出来る。例えば、その事実を知っているかを先ず問い、知つていると云えば、果して本当に知つているのか、どの程度理解しているのか、判明出来る適当な質問を補うことによつて、その真偽を確かめるが如きである。これについて、Janoda 等は回答がどれだけ信頼し得るかを評価する規準を、次のように明らかにしている。

即ち彼等は、年齢、教育、収入、職業等回答者の背景、家族、友人の如き回答者に親しい人々の特性（行動、信条、感情）、更に回答者が知っている事件、事情の如きものについての、所謂、事実を發見せんとする質問において、報告せられた事實は常に回答者の信用出来ること（credibility）によつて評価されねばならないとし、次の如き諸点を考慮すべきとした。即ち、回答者はどんな機会でその事実についての知識を得たか——直接観察によるか、推理によつてか、噂を通じてか。その事実を報告するに當つて、回答者のうちに、どんな動機がはたらいているか。その事実に関する回答者の記憶はどれだけ正確か、等がそれであつて、彼等によればこれら要因はすべて、例えば夫の収入に関する妻の報告の如き、明らかに単純な報告部分にさえ影響するのである。彼女の報告は夫の云つたことに基づいてゐるかも知れない。夫は嘘を云つてゐるかも知れない。面接員にいいところを見せるために高く云つてゐるかも知れない。或は夫の収入にはあまり関心が無いから、はつきり覚えてゐないかも知れない……等々と考えられるのである。⁽⁷⁾しかしながら、敢えて偽りを云おうとする人を抑止することは出来ないに違いない。けれども、これにはそう大して失望する必要はない。Goode & Hart も指摘するように、熟練した面接員でさえ常に眞實を得るものではないのであつて、ただその回答がどれだけ眞實であるか眞實でないかを見究め得るにすぎないのである。回答の眞偽を區別し得ることは、社会調査において、たとえ眞實の回答を全く引出し得なかつたとしても、根本的に重要な価値ある事柄である。⁽⁸⁾最も大きな誤りは、回答を區別なくすべて正しいと直ちに信じてしまうことから生ずるのであるから。

回答者は、質問を文字通りに受取らないで、問われているものはこうだと、自分で解釈して回答する傾向をもつ。故に質問は、誤解されないよう用語は明確に規定され、言葉使いは簡單明瞭でなければならぬ。

先ず、Maullin & Marts はこれについて次のような経験を報じている。農民に対して、「何か果物の木をお持ちですか」と問うたところ、二十人がその間に「いいえ」と答えた。しかし、更に「それが若い木であろうと、また果物

が出来るか出来ないかにかかわらずなく一本でも二本でもいいんです、一本もありませんか」と問うと、その二十人の中十三人が「もつている」と答えたのである。さて、Mauldin & Marks はこれについて、次のような解釈を与えている。もたないと云つたのは、回答者が何等不正直だからではなく、「あなたはそんな古い木のことなんかについてお聞きになつていないんだらう」と仮定して、氣を利かしたからであると。かくて質問を評価するに当つては、「この質問は何を意味するか」と問うよりも「回答者はこれを如何に解釈するだらうか」と問うことが、一層重要なことを銘記しなければならぬのである。(9)

このような意味のとり違えは、用語の明確な規定、即ちその語がまさに意味しているものは何であるか(果実の木は古くとも若くともとにかく果実の木なればよいのか、それとも現に果実のなる木を意味するのか)を、判然とならしめることによつて防がれる。またこれによつて、それぞれその屬性を異にする回答者が、同一の關係枠で回答し、回答の比較可能性を樹立せしめることが出来る。長い難しい文章からなる質問は、多くの回答者に誤解されがちである。文章の構造は、第一に、短かくて分り易くなければならない。調査者はこの程度ならばと考へて、ついアカデミックな表現に類つてしまふが、なおそれは、かなり多くの人々によく理解されなかつたりする。故に質問の言葉は、最低の教育を受けた人にとつても、よく理解されるように考慮しなければならない。しかし日常親しんでおり、簡単な言葉ならどう用いようとかまわぬというわけにはゆかない。Kornhauser は「あなたは、戦後米國で、多くの変化ないし改正 (many changes or reforms) がなされればよいと思いませんか、それとも戦前と殆ど同じままである方がよいと思いませんか」と問う質問について、次のように述べている。「変化」とか「改正」とかいう言葉は回答者の頭の中にナイロンのストッキングの事から社会主義政權に至るまでの範圍を含み得るだらう。また、この質問の性格からして、肝要なことは変化の数でなくて、変化が如何に大きく基本的であるかというたちの問題である以上、この「多い」という言葉は人によ

つてどう解釈されるか、果して質問の意味通りに解釈されるか、分つたものではない。また「殆ど同じまま」という言葉も、明らかに曖昧で大いに相異なる解釈を受けるであろう。要するに質問の言葉は、単に易しいというだけでは充分でなく、前述したように、意味されているものが何であるかを明確にし、誤解を招いたり、または人によつて非常に異つて解釈されないようにしなければならぬのである。⁽¹⁰⁾

極く些細なものであつても、質問の言葉使いの差異は大きく回答に影響する場合がある。回答のある一定の方向に偏らせるような問い方をしたり言葉を用いていないかをよく見究める必要がある。

例えば、米国が戦争に介入せんとしているかどうかを問うた二つの平行的な質問による、一九三九年米国における世論調査は、世論が定まらない状態にある場合、一寸した言葉の含みが、如何に回答に影響したかを示している。即ち「戦争が終らない中に米国は参戦するだろうと思いませんか」という質問では、「然り」が四一%「否」が三三%であるに対し、「米国は戦争せずと思いませんか」では、「然り」が四四%「否」が三〇%、なお「わからない」が何れも二六%で、全く異つた結果を示したのである。⁽¹¹⁾

簡単な例でこの問題を考えてみよう。「一月に何冊程本を読みますか」というような質問は、実際よりも以上に多く読んでいるという回答に導くだろう。これは云うまでもなく、人は一月に一冊以上の本を読むものであるという期待、要求がその質問自体において強調されているからであり、人はかかる圧力に、多くの場合、屈服せざるを得ないからである。だからこの場合では、何か本を読むか、どれ位読むか、どんな本を読むか、本の題名は何か、等と問うことが望ましいのである。⁽¹²⁾

このように、質問が回答者自身の中にある本来の事柄を云わしめず、自然とある方向に偏らせてしまふ傾向について述べられた検討が、R. K. Merton & P. L. Kendall の“The Focused Interview”に見られる。彼等の強調すると

ころは、ある質問は、たとえそれが誘導的な性格をもたないでも、回答者が自らの自発性で回答しないところの項目や問題に注視を余儀なくさせ、結局回答者自身のものを引出せない事態を生むことにある。「あなたは、アメリカ人がナポリの再建に如何にあずかつて力があつたかを知つて、誇りに思いましたか、それとも迷惑だと思いましたか」——イタリヤ戦役の記録映画を観た人々に対するこの質問を、Merton & Kendall は次のように批判する。

この質問は、アメリカ人が現にナポリの再建に協力した、と云い切つて回答者に迫つてしる。しかし、回答者は映画を観てかかる点をはつきりと感じとつたかどうかは分らない。例えば、ある人は仲々面白い映画だと思つただけで、かようなことは別に気にとめなかつたかもしれないのである。かくて、このようなディレクティブな質問は、回答者が実際にどのように感じたか、を明らかにする可能性を一瞬にして偏らせ、自分の解釈の色づけや質問の誤解に知らず知らず導いてしまうであろう。かくて彼等は、こうした欠陥を排除するには、ノンディレクティブな質問方法によるべきとして、これを推奨し、更にこの方法から“Focused Interview”という、宣伝の効果等に大いに適用せられる、一つの独自の面接調査法を考案したのである。⁽¹³⁾

遠い過去の特定時期に関する質問は回答誤差を蒙り易い。故にこの場合、既存の記録に頼るか、質問による場合は、回答者に身近な事柄から順々に細かく問うてゆくことによつて、少しずつ経験を正確によび戻してゆくことが必要である。これは単に遠い過去のみに限らず、回答者の注意を引かない多くの事柄にも適用されるであろう。

Mauldin & Marks は「大抵の回答者は統計局に正しい回答を与えており、少くともわざと嘘をつかないものと考えられるが、過去の出来事や一続きの出来事を正しく想起 (recall) し得ないことからある誤差が生じる」⁽¹⁴⁾ことを指摘している。この一例を示してみよう。かつて F. F. Smith は書物のリストを作り読んだものをチェックするように学生に求めた。このリストには沢山の存在しない本が含まれていたが、その学生の四分の一以上がその一つ以上にチェッ

クするという結果を得た。Ackoffはこれについて次のように批評している。存在しない本を読んだことがあるというとき、彼はわざと嘘を云つているのではない、その題はよく見たような気がし、読んだことがあるように思ひこんでチェックしてしまつたのであろう、と¹⁵⁾。われわれは、幼年期の経験事実の如く遠い昔の事を生々と呼び戻し、事実を間違ひなく話すのは非常に困難であることを知つてゐる。しかし近ければ近いほどよく覚えてゐるわけではない。特に関心をもつてゐない事柄は忘れがちであるし、またこの際、目撃者の報告が如何に出鱈目な場合が多いか、という周知の事実も思いあわせておく必要がある。よく考えれば、Mauldin & Marks が回答誤差の問題に大きな位置を与えた「記憶の貧弱さ」(poor recall)の事例を、無数に発見することが出来よう。ではこの問題はこうしたら解決されるだろうか。

先ず遠い過去の事実や、その他回答者が正確に想起するのが、無理だと考えられる客観的情報を求めようとする場合は、可能ならば利用出来る記録に頼つた方が適當かも知れないだろうし、或は一層高度な観察方法が必要とされるかも知れない。一方、質問による場合は勿論充分な考慮が必要である。Goode & Hartは、遠い過去の特定時期の事柄等は不用意に問えば「わからない」とか、得られたとしても極めて信頼出来ない回答しか得られないこと、故に回答者に身近かだと思われる事から、順々に細かく問うていき、タイム・ラインにそつて、関連的に少しずつ経験を正確に呼び戻して行くことが、必要であると述べてゐる。換言すれば、Jahoda等が指摘するように、正確な回答は、一般的な質問よりも、特殊な質問によつて得られるということである。このようなやり方は遠い過去の事柄に限らず、現在の行動や事実、習慣的な日常行動を明らかにする場合にも等しく有効な方法である。これは次の項で述べよう。

漠然とした一般的な質問、二つの別々の事柄を一つに纏めて問うてゐるような質問は回答誤差を導く。正確な回答はむしろ特殊な具体的な質問によつて多く得られるものである。

例えば、ある市場調査において、「あなたはいつも何印イマレドのコーヒーを使っていますか」と問わないで、「今お宅では何印のコーヒーをお持ちですか、お見せ願えませんか」「お宅はいつもこの印のものを買つてらっしゃるのですか」と問う。また偏見に関する調査では、「この前の市長選挙であなたは誰に投票しましたか」「どうしてその人に投票しましたか」「候補者の人達の宗教を知っていますか」「候補者の宗教は何であるかを知ることにより、何れかの候補者に加担したり反対したりする影響を受けましたか」「あなたは、何時も誰に投票するかを決める場合に、候補者の宗教を考慮しますか」と問われた。これは最後の質問一つだけで問うより、はるかに正確な回答を得ることが出来るのである。即ち「具体的な実例 (instance) を規定し、この実例が典型であるか無いかどうかを問うことによつて、回答者に回想の一層の手がかりを与える」からである。⁽¹⁾

では一般的な型で問う質問にはどういふ危険が潜んでいるのであろうか。これについて Kornhauser は次のような事例をあげている。ある態度研究において、黒人に対する感情について問われた大ざっぱな質問では「良好な関係 (good relations) と分類出来る回答を引出した。しかし更に特殊な幾つかの質問によつてこれを行つと、この「良好な関係」とは、他ならず実に、黒人達との接触を全く避けることに存しており、事實は全く逆であることが明らかになつたのである。かくて、Jahoda 等と同じように彼もまた、正確な回答を得るためには、質問は具体性と特殊性をもち回答者の個人的経験に密接に関連させることの必要を説いた。即ち、「この本はお好きですか」と問うだけでなく、「誰か他の人に推薦したことがありますか」「同じ著者のものを他に買ったことがありますか」と問うことによつて、どれだけ好きかという主観的な感情表示も、一層明確に捉えることが出来る」と彼は主張する。また、婦人の朝のラジオ聴取番組の調査では先ず今朝聴いたもののリストを獲得し、更に昨日のものを獲得し、最後に、彼女が何時も午前中に聴くのはどのプログラムかが問われた。これは「何時も聴くのはどの時間、どのプログラムか」と問うよりも正確な事

実の報告を得るだろう。要するに、日常的、習慣的な行動の発見は、何時も何をしているかと問わず、特定の最近の事柄を問い、季節的・時期的な、またその他の特異性を克服する点まで質問をおし広めることによつてなされるであろう。加えて、特殊なものが一般的なものを表わしているか、それとも単に特殊に留まるかということもこの際考慮することを忘れてはならない。

このように一般的な問い方が特殊な、具体的な問い方に改められねばならないことは、質問が一つの長い質問よりも幾つかの質問に細分されることを意味している。かくて、その質問は、更に細分または追加されるのがよいか、どうかを検討しなければならぬ。この際、単一な質問で二つの点を同時にカバーしようとしていないかどうかとも知らなくてはならない。例えば、少数者集団に対する感情を問う質問で「黒人とユダヤ人とに対する……」と問わないで、それぞれ黒人は黒人、ユダヤ人はユダヤ人について別々に問うべきである。複雑な内容を含む問題を、何とかうまく言い廻して一つに纏めて近道を行こうとする誘惑はよく起りがちであるが、決して正確な回答を望めないものであり、極力避けなければならぬ。たとえ一つの事柄のみを取上げているとしても、一つきりの質問で終つてしまえば、回答者の回答が偽りでないか、如何に表面的であるか、どういふ解釈でかかる回答をしたのか、照合することは出来ない。Korhauer は、一つのトピックの異つた諸側面に、それぞれ特殊な質問をたて、一つの質問のチームを発展さすことにより、より一般的な単一な質問から得られるより、明確で有用な情報を獲得し得るとした。しかしこのために無暗に不要な質問を増さないように注意しなければならぬ。かくて、その質問は単一なもので充分であるか、それとも幾つかの質問の組を用うべきか、また質問の組を用いるとしたら、どういふ側面をとりあげたらよいか、等をよく考慮しなければならぬ。これも結局、われわれの求めんとする情報は何であるかという、調査計画の基本段階に結びついたものであり、故に研究問題の詳細な検討を俟つてのみ決定される事柄であることを知らなければならぬ。

回答者を当惑させたり、或いは抵抗や回避に導くが如き種類の質問は、取り除かれるべきである。もし必要ならば、間接的テクニックによるかして、その問い方に充分考慮が払われなくてはならない。

回答者を甚しく刺戟するような質問は、中心問題に大して関連がないのなら、調査票に入れるのを見合わせた方がよい。何となれば、かかる質問によつて回答者に反感を起させれば、さうでない他の質問にまで悪影響を及ぼし、全体の調査が損われてしまうからである。もし入れるのなら勿論不用意に取扱われてはならない。そこで今日、回答者を甚しく刺戟することなく、かかる情報を引出すテクニックが、種々考案されている。間接的方法 (indirect technique) と云われるものがそれで、それには、問われている事柄について、回答者自身に直接圧力をかけないように焦点を他に転ずる方法と、求める情報を直接問わないで、それに関連するさしさわりのない事柄について間接的に問い、その回答から本来の情報を推定しようとする方法とがある。

例えば、募金運動にどれだけ寄金したか、何故したか、また、何故もつとしなかつたかを直接問わないで、「あなたの知っている人」「あなたのような人々」はそれに関してどうだつたかを問い、また生活について「人々は大抵、うまくやつていくのは難しいものか」という問によつて彼の苦境を知ろうとするが如きである。これは、他人について云うことは、彼自身についても真実であるものの投射 (projection) であるという推定に基づくものであつて、故にこれは、必ずしも手離しで受け入れられてよいものとは限らない。だからこうした間接的な問は、例えば「それではあなたはそれについてどう思いますか」とつけ加えるのがよいとされる。⁽²⁰⁾

次に、第二の事例を夫婦和合 (marital adjustment) の測定に関する質問について考えてみよう。E. W. Burgess, H. J. Locke, L. S. Cottrell, L. M. Terman 等においてみられる如く、この分野の研究では、従来、主として直接的アプローチが用いられている。即ち彼等は、例えば「あなたの結婚は幸福ですか」「配偶者を信頼していますか」「配

偶者に毎日接吻しますか一等々の如き種類の質問に三に頼つてゐるのである。しかし夫婦和合の測定は、このような質問で、回答者に真正面から挑戦しなくとも、充分その成果をあげ得、しかもより以上の成果をあげ得るという主張が一方に存在する。直接的アプローチとしての Terman の Marital Adjustment Scale と間接的アプローチとしての Clifford Kirkpatrick Family Interest Scale との比較研究において M. J. Taves は夫婦和合の測定に、後者はむしろ前者以上に有効であることを明らかにした。彼が間接的アプローチとして用いたものは、「旧友を訪問する」「子供と遊ぶ」「音楽を聴く」「酒を飲む」等々六〇の短い文を提出し、回答者が好んでするものにチェックさせ、自分だけで楽しむもの、配偶者がいても楽しいもの、配偶者と一緒の場合のみ楽しいものの別に、情報が得られるようにスケールされたものである。彼は、実験的に高い和合を示すように動機づけられた実験集団と、その対照集団とにそれぞれこの二つの方法をテストした。この結果、彼は間接的アプローチは、その平均点が実験集団の八一・一から対照集団の七九・七の如く些細な差異を示したのにすぎなかつたのに対し、直接的アプローチでは、七七・五から六八・五と九点もの差異を示し、その臨界比は統計的にすぐれて有意なことを明らかにした。これに基づいて彼は、間接的な問い方は、時には直接的な質問に対して回答者に起させる抵抗や反感を回避し、更に、何が問われているか、求めている主題をかく交相することによつて、問われているものが何であるかが全く明白なことから生ずる回答者に動く不純な動機（即ち、夫婦和合が測定されることが分つてゐるから、若し高い和合度を示した方が自分に好都合ならば、斯様な方向に事実を歪めて報告することが出来るであろう）を回避し、より信頼出来る回答を引出せることを主張したのである。しかし、間接的アプローチが、問題なくすぐれているというわけにはゆかない。Taves 自身も、管理・解釈に容易で能率的である点で、直接的アプローチの優位性はこれを認めているところである。Kornhauser は間接的アプローチについて、その意図された推論は、間接的な証憑から安全に引出せるか、回答を偏らせるような種類の徴候はない

か、「邪推を起させそうにないか、等々を検討する必要を説いている。要するに、間接的テクニックを用いる場合は、問題問題により、調査目的をはつきりと留意して、この方法の可能性と限界を、充分見究めなければならぬのである。⁽²⁾

回答の形式をチェック・アンサーかフリー・アンサーか何れにした方が、その質問に適切な回答を得ることが出来るか、更に、質問の順序配列は回答者が回答し易いように配慮されているか。

以上のように、質問の問い方、言葉の使い方の問題と平行して、回答の形式はどうするか、質問項目をどのように配列したらよいかを考えられねばならない。先ず、回答の形式としては、前以て作成された選択肢 (alternative) を選ぶチェック・アンサーと、回答を回答者の自由にまかせるフリー・アンサーとが考えられる。チェック・アンサーには、ある事柄について、「然り」「否」とか「賛成」「反対」とか、「する」「しない」とか二分されるものと、三つ以上に分けられる場合とがある。最初のものは、人々の意見がこの二つの何れかに明確に結晶化される問題に適するものとされているが、それでも「はつきりしない」「同じ」「どちらともいえない」等の中間の回答を含むのが願わしいとせられる。このような回答を含むことは、はつきりと意見を表明する気がない回答者に簡単に逃げ道を与えることにはなるが、極端な二つのカテゴリに回答者をおしつけることは無理を生じ、かえつて誤つた結果に導くものである。かくて選択肢は、少なすぎるより多い方が適切と云えるが、この場合、重複していかないか、重要なものが抜けていないか、充分に明確で他のものから区別されるか、どれもこれも至極尤もだと考えられる幾つかの選択肢から一つを選ばそうとしていないか、ぼんやりした贅的な用語を使っていないか、等々がよく検討されねばならない。

二三の例を挙げてみよう。どんな雑誌を好むかを問うチェック・リストに、ポピュラーな雑誌を一つ除くと、最後に「その他」の項が設けられていても、他のものに比べてそれは大きな被害を蒙る。それは説明するまでもなくわざわざ考えて「その他」の項に書き込むよりも、提出された選択肢の一つを選んでおく方が回答者にとっては遙かに簡単だか

らである。また、一違のあり得べき理由を列挙して、回答者があることに賛成（又は反対）する理由を求められる場合には一層、選択肢はかかる影響力を發揮し、結局、自分自身の心にもつものを明らかにし得ないことになつてしまふ。本当の理由をよく考えて、長々と書き込むのは、面倒なことであるからである。また、今一つの例を挙げてみよう。「広告放送についてのあなた御自身のお考えに最も近いのは、次の四つのうちどれですか」と問い、その選択肢が、「買いたいものを教えてくれるから（ラジオによる）広告放送に賛成する」「広告放送は別に気にとめない、プログラムを楽しむのにそう妨げにならない」「広告放送は好まないが我慢出来よう」「すべて広告は、ラジオから取り去られるべきだと思ふ」等であれば、この場合もし、回答者が最初のものに賛成するとしても、「買いたいものを教えてくれるから」でないならどうだろうか。

さて、チェック・アンサーはもともと、適当な選択肢を提出することによつて、どういう專柄が求められているかを回答者に理解させる手引であり、質問が全く違つた意味に取違えられることを防ぎ、回答を容易ならしめる手段である。この点、非常に有効ではあるが、ともあれチェック・アンサーは、一応回答者がどうであろうと、既成の選択肢の選択を強要するものといえるから、その作成に當つては、この点出来る限り考慮しなければならぬ。これに対してフリー・アンサーは、質問はただ、きつかけを作るのみで、回答はすべて自身の表現で表わされ、従つて回答者の心にあるものをより詳細に引出すことが出来る。しかし回答者の一層の協力を要し、分析に一層の労力を要するという短所がある。さて、どの形態の回答形式にするかは、それぞれ質問に応じて考えられねばならないが、チェック・アンサーの問に、フリー・アンサーの問を加えたりして、この二つを適当に組合わせたものが、最も良き結果を得るといわれている。²³⁾

次に質問の順序・配置の問題に移ろう。例えば工場労働者に、始めに、自分の職長を好んでいるかを問い、その次

調査票作成における諸問題

に、労働条件のどのような面の改善を望むかを問えば、後者の回答として、「より良き監督」が、他の事柄に比して、不相応に強調されることになる。従つて一般的な質問と特殊な質問がこのように同種の事柄について問われる場合、普通、一般的なものを先にする必要がある。また、一番最初から、「あなたは何処に勤めていますか、所属されている部処は」とか、「最近の政府の政策について……」とか、突如として問うことは言うまでもなく避けらるべきである。それは、回答者に当然猜疑心を生み、面接を拒否させるか、若し回答したとしても、多分真実のものは得られないだらうからである。かくて、個々の質問の言葉使いや問う方の外に、質問をどのような順序に配列するかということも、調査票作成の重要な問題としなければならぬ。質問の順序は、回答者の側における自然な心理学的継起に従つて定められ、調査票全体を一つのユニットに結束せしめるような形に諸項目が配列せられることが肝要である。先ず、さしざわりのない、関心をもたれるような、易しい質問から始め、回答者を面接におびきよせる。問題のある項目を最初におけば、後でおく場合よりも、余り協力的でない回答者に拒否されてしまう割合が多いからである。簡単なものから次第に複雑なものへ移行し、回答者をますます面接に巻込んで、やめてしまえないようにしてゆき、次第に核心の問題に入つてゆく。また質問は同じ題材のものを一つに纏めるようにし、出来るだけスムーズに質問項目から質問項目へと運行されなくてはならない。質問がこのように配列されていけば、回答者が単にテストされているのでなく、有意義なある事柄に協力しているという感情を与え、一方、面接員の能率を高め、正確な回答の獲得に大いに寄与し得るからである。⁽⁴⁾

- (1) Russell L. Ackoff, "The Design of Social Research" 1953, p. 324 & p. 325.
- (2) Kornhauser, op. cit., p. 436.
- (3) Goode & Hart, op. cit., p. 157.
- (4) Deming, op. cit., p. 362.

- (5) Ackoff, *op. cit.*, p. 324.
- (6) Alfred McClung Lee, "Sociological Theory in Public Opinion and Attitude Studies" in *American Sociological Review*, 1947, June pp. 314-15.
- (7) Jahoda, Deutsch & Cook, *op. cit.*, pp. 160-61.
- (8) Goode & Hatt, *op. cit.*, p. 161.
- (9) Maudlin & Marks, *op. cit.*, p. 650. 著者は Ackoff の調査に於ける家産としてこの調査結果を述べたことと見解を述べたこととを認める。(op. cit., p. 225)
- (10) Kornhauser, *op. cit.*, pp. 443-46.
- (11) *ibid.*, p. 449.
- (12) *ibid.*.
- (13) R. K. Merton & Patricia L. Kendall, "The Focused Interview" in the *American Journal of Sociology*, 1945, May, pp. 541-557, p. 545.
- (14) Maudlin & Marks, *op. cit.*, p. 652.
- (15) Ackoff, *op. cit.*, p. 220.
- (16) Goode & Hatt, p. 151, p. 167.
- (17) Jahoda, Deutsch & Cook, *op. cit.*, p. 169.
- (18) Kornhauser, *op. cit.*, p. 438.
- (19) *ibid.*, pp. 427-28.
- (20) *ibid.*, pp. 441-42.

調査票作成における諸問題

調査票作成における諸問題

21) Marvin J. Taves, "A Direct VS An Indirect Approach in Measuring Marital Adjustment" in *American Sociological Review*, 1948, Oct. pp. 538-41.

22) Kornhauser, p. 452.

23) *ibid.*, pp. 453—459. (Tahoda, Duetsch & Cook, op. cit., pp. 171-75.)

24) *ibid.*, pp. 460-62. (Goode & Hatt, pp. 136-38.)

五

最後に、質問は面接によつて問うのがよいか、それとも質問紙によつて問うのがよいかという問題に移らねばならない。この何れを用いるかは、質問をたてる前にあらかじめ決定されている事柄である。さて、この二つの方法の違いは、質問回答が面接員によつて書き込まれるか、それとも回答者自身によつて書き込まれるかにあり、面接員の有無をめぐつてこれには多くの問題が含まれている。

先ず、質問紙は、数多くの人々を一斉に、しかも先ず一様といえる測定状況において測定することが出来、管理に容易であり、時間と労力を大して要さないという最大の利点がある。その上、大つびらに云い難い取扱い難い問題に対しては、面接員という社会的圧力を排除する匿名の質問紙によれば、一層効果的だという主張もある。しかれば、面接員を確保し、それを訓練し、回答者に一々面接して行く手間なやり方に、どんな利点があるのだろうか。若し質問紙が同一調査主題について、面接以上の成果をあげ得るならば、でなくとも、面接と同じだけの成果をあげ得るなら、いうまでもなく労力的に安価な質問紙が用いられるべきであろう。しかし果してそうであろうか。先ず問題は、方法を異にするこの二つが、同じ質問を用いた場合、同一の結果を得るか得ないか、もし結果が異つているとすれば、どれだけ大きく

か、どの点で異つているかということである。われわれはこの問題を、若干の実験研究の成果を検討しながら明らかにすることにしたい。

先ず V. Ellis の研究から始めよう。人間の性、恋愛、夫婦関係について多くの調査がなされてきている。このいわば取扱ひ難い問題は古くは面接により、のち次第に質問紙がとつて代る傾向にあつた。しかし Ellis は、この種の問題に対して、この何れの方法がすぐれているか、何等結論を得ていないとして、一つの実験研究を行つたのである。彼は六九人の女子学生に対して最初面接により、次に一年を経て、匿名の質問紙により愛と性に関する質問調査を行つた。この二つに用いられた六〇の相似た項目に対する回答を比較検討したとき、彼は、回答者の多くが二つの回答を変化させていたこと、しかも回答者の大部分は、面接のときよりも質問紙に、自分に都合の悪い回答を与えていたことを発見した。このうち、幼年期における父母への愛情や、愛人に対する極度な感情や行動を問うた、一〇項目では、かかる回答の差異は特に大きかつた。そして Ellis は、この研究の結果、カレッジの学生の愛及び夫婦関係の研究調査には、質問紙は面接と同じく満足な結果を得ることが出来るものであり、更に、答え難い質問については、面接よりも質問紙による方が、一層有効であるという結論に到達したのである。

さて、Ellis の質問紙宣讀の根拠は、面接では何等かの当惑、抵抗を感じさせるような質問でも、質問紙では、たとえその回答が自分に都合よくないとしても、事実を述べるにはばからないところにある。かくて彼によれば、「十二歳になる迄に母親をどれだけ愛したか」という質問に対して、回答者が質問紙よりも面接において、一層「愛して」と主張した理由は、次のように説明される。即ちそれは、われわれの社会において、人は母親をよく愛せねばならないという觀念をもつて育てられているからであり、従つて面接員という一つの社会的圧力に対しては、かくも愛していたことを信じさせたいからである、と。また面接よりも質問紙において、愛する男性に対し恩慕、献身及び愛情の極

度な感情を表明したのは、われわれの社会が愛や情のもろさ(tenderness)を一種のタブーとしてしているからであり、従つて面接員という社会的圧力の下では、抑止されようとするからであると解するのである。⁽¹⁾

さて、面接員が回答者に、ある事実を言うのをはばからしめる社会的圧力を行使し、従つて、面接員を要さない匿名の質問紙によつて、より信頼出来る回答を引出し得るといふのは、性や愛の問題のみに限らない。H. Metzner & F. Mann は、工場労働者に対し、仕事に対する満足・不満足の状態調査を、質問紙と面接との二つの方法によつて行い、その結果を比較した。この結果、回答者は質問紙におけるより以上に面接においては、「満足」を示し、反対に、面接におけるより以上に質問紙において、「不満足」を表明していることが明らかにされた。⁽²⁾ また、タイム購読者に対する

P. F. Lazarsfeld & R. Franzen の同様の比較研究は、面接によるよりも質問紙によつて、一層信頼出来る回答が得られることを示した。即ち、回答者は質問紙におけるよりも面接においては、教育程度を高く、読書時間を長く報じたこと、また収入の如き私的な事柄に関する質問では、質問紙の方が遙かに回答率の大きなこと、更に購読雑誌数では、質問紙における方が数が大となつてゐること等に基いて、彼等は次のように解釈する。一つの社会的圧力を含む面接状況では、面接員にいいところを見せようとしたり、ある事実を隠そうとしたりする動機が回答者のうちにはたらく、結局、回答は多く皮相的なものに留まるのに反し、質問紙ではよく考慮する時間と余裕が与えられ、より確実な回答が獲得されるのである。⁽³⁾

これら質問紙の優位性の主張は、しかしながら、それが単にまぎれもない実証的研究に基いてゐるといふ点だけでは、われわれを首肯せしめるものではない。先ず第一に、その研究の方法や条件にある疑念を抱かざるを得ないだろう。例えば、Ellis の場合では、面接がなされ第二回目の測定として質問紙が配布されるまで、約一年を経過してゐる。⁽⁴⁾ この間に、回答者がかつて大つびらに云うのをはばかつたものをはばかりなく云うように、表明に対する態度そのものが急

速に変化したと云えないであろうか。Metzner & Mann にしても、第一回目面接の回答者と第二回目面接の質問紙の回答者とをマッチ出来たのは、やつと四四%に過ぎなかつたところから、この二つの異つた方法における回答を比較する全ての困難を自ら認めている。⁽⁵⁾ また、始めて測定を経験する第一回目と、かかる刺激を経ての第二回目とは、測定情況は如何に異なるかと云うことも考慮されなければならないだろう。更に Lazarfeld & Franzen の場合では、高い教育程度、長い読書時間を報じた面接への回答が、面接員という社会的圧力を前にしての皮相的な回答にしかすぎず、読まれる雑誌数が一層多いと報せられた質問紙への回答が、よく考える余裕を与えられたからだとは、どうみても質問紙に加担しての、結果に対する勝手な解釈と言わねばならない。しかもこの調査研究では、質問紙が三、〇〇〇人のタイム購読者に送られ、一、〇五二が返送され、元の三、〇〇〇人の中一、三八七人について同じ質問紙により面接され、うち五〇五人が質問紙回答をも与えていたので、結局二つの回答が比較されたのは、ただ五〇五に留つたことに注目しなければならぬ。⁽⁶⁾ H. Hyman は、比較されたのは質問紙にも回答した者のみであること（質問紙をわざわざ返送する労をとつた、いわば熱心な人達が、回答を書き込まずに済ますことはあり得ない、故に質問紙の方が回答が多く得られ、詳しい回答が得られたのはむしろ当然である）、それよりも質問紙に全く回答しなかつた者が、遙かに多くあることを指摘し、質問紙が面接にとつて代るといふ結論は、早まつたものであると主張する。⁽⁷⁾ ここに質問紙の回収の問題をめぐつて、この方法の最大の限界が明らかにされるのである。

本範圍にわたる調査で、質問紙が母集団のランダム・サンプルに郵送される場合、回収率は通常低く、わずかに一〇%から二五%であるという。⁽⁸⁾ この理由は、先ず質問紙が読み書きの能力に大きく限定されることを想起すれば充分である。即ち、極く簡単なものでも不可能な人がかなり存するし、また教育があつても、喋るようにはなかなか書けないものだし、書くことの煩しさは吾人の等しく認めるところであろう。もし質問紙への回答者が、全サンプルを代表する如

き様式で全体に万遍に行き渡っているならば、ある程度まで返送率は低くとも、一応は、全体を推するに大きな偏りを生じないだろう。しかし、既に明らかにしたように、単に読み書きの能力だけについてみても、こういうことは殆ど起り得ないのである。H. A. Edgerton, S. H. Britt & R. D. Norman によれば、誰が質問紙を返送するかという問題は、この方法に関してまさに死活を決する重要問題であつた。⁽⁹⁾かかる観点から始められた彼等の丹念な研究に進む前に、先ず、この問題に関する、それ以前の幾つかの研究を一瞥してみることになしよう。

先ず、R. J. Bail は不良少年の父兄に簡単な質問紙を送つたところ、自分を具合よくみせるような報告なり、返送が多かつたことを発見した。F. Stanton の学校放送の利用状態に関する学校の調査では、督促を要した回答者と督促なくして回答したものとの間に著しき相違があり、ラジオ設備の有無、校長が教育事業におけるラジオ放送に関心をもつているか否かによつて、返送が左右されたことを明らかにしている。また、カレッジ卒業生の職業調査を行つた F. K. Shuttleworth や C. R. Race 等の研究は大学を卒業したか否かということが、返送したかしなかつたかに関連されてることが明らかにされた。更に世論調査では、I. E. Banson は、ある事情の下では高い収入や教育をもつ人々が多く返送し、また意見を求められぬトピックに対して、強い関心や意見をもつ人に返送が偏ることを指摘した。⁽¹⁰⁾

さて、本題の Edgerton 等の研究に移ろう。彼等は奨学資金受賞選衛試験における成績により組分けした A、B、C 三つのグループに、毎年一つずつ四年に渡つて質問紙を送り、成績と返送率との関係を詳細に分析研究したのである。この結果彼等は、A のグループは最高の回収率を得たまま毎年持続され、B のグループはそれに次ぐ回収率を示すが、第一年目の九三%から第二年目に八六%第三年目には七九%を降り、C のグループでは第一年目の八〇%から第二年目の六三%第三年目の五六%と降つたことを明らかにした。このように、すぐれた個人は回答の度数が大きく、更に一度きりでなく持続して回答する傾向について、彼等は、次のような解釈を与える。すぐれた者は、調査に協力したい意

志があること、そしてA及びBの二つのグループは、この試験の主催者であり、また質問紙の主催者でもあるものから、何等かの賞与を受けており(Aグループは賞金をBグループは賞状を受けている)、従つて主催者との密接な結びつき、賞与に対する義務觀念が、返送を刺戟したものであるという。ともあれ、彼等によれば、回答者と非回答者とに分つ側面は、調査トピックに対する関心の有無という前述の諸研究に一致するものであつた。かくて彼等は、この研究の結果、インテンシヴな活潑な督促が郵送質問紙には欠くべからざるものであることを強調したのである。でなければ、調査トピックに特殊な関心をもつものみに回答が集中し、それとは往々異つた傾向をもつ、それ以外の人々の回答を全く失つてしまひ、かくて、その調査は偏つた結果を招いてしまふからである。⁽¹¹⁾ 学校が学生に、医師会が医師にといったような、回答者にある權威をもつ主催者によつて、調査トピックに関心をもつと推定される、ある特定の同質的なグループにのみ限つて質問紙が送られる場合は、前述の欠陥が一応回避され、質問紙の回収率は高くなり、かなりの効果をあげることが期待出来るとも考えられる。何れにせよ、質問紙を用いるか否かは、調査トピックが何であり、回答者がどのような人達であるかをよく考慮した上で決定するべきであり(勿論、費用や適切な面接員の有無等實際的な事情もあるが)、またそれが用いられる場合は最大の回収率を挙げるよう常に配慮されねばならないのである。

さて、回答者を面接員という社会的圧力下におくことを排除し、余裕のある情況を作ることによつて、一層信頼出来る回答を引出せるといふのは間違ひなくさうであらうか。Hymanはこれを否定する。即ち、回答者はそれがやがて將來読まれることも考慮して、質問紙に書き込むことが充分に考えられ、従つて面接員が現に目前にいないとも、面接員の及ぼす同様の影響がみられるというのである。⁽¹³⁾ 自分の手筆で自分の名の下に紙に書き込まれる回答の嚴肅性及び恒久性は、タブーとされていたり、または社会的論争を含むトピックについて、卒直に回答するのをかえつて妨げるかも知れないことも考えておかねばならない。勿論、この問題は、匿名にするか記名にするかによつて、かなり異なるである

調査票作成における諸問題

う。しかしこの匿名性が回答者によつて真実、匿名であると受入れられるか否かは、回答者が行われる調査について如何に情況判断するかに依存している。Metzner & Mann は、前述の工場労働者に対する面接と匿名の質問紙双方による調査では、ブルー・カラー・ワーカーが真実に匿名であると確信したほど、ホワイト・カラー・ワーカーはそれを確信しなかつたことを指摘している。⁽¹⁵⁾これは、後者が前者ほど、二つの測定用具における差を示さなかつた事実についての解釈としてあげられたもので、もとよりこれは推量に留まるものであろう。しかし、何れにせよ、匿名ということが真にそうだと受入れられるかどうかは大きな問題であつて、調査の結果は回答者がどの程度にそれを受入れるかによつて、影響されることは疑いなくであらう。

また、質問を行い回答を解釈し記録するにあつての、面接員による誤差は、質問紙によつては排除することが出来ても一方、回答者が質問の意味するところを正確に理解し、充分それに答へ得るかが問題とならう。更に、回答者が事実を歪めて報告しても殆どその真偽を確かめる手段はない。即ち Hyman も指摘するように、面接員が存しないというその事実が、一つの偏りを生む因子 (a biasing factor) として作用するのである。⁽¹⁶⁾質問紙のこうした欠点を考慮してみると、面接の利点は自ら明らかとなる。それは読み書きの能力、関心の有無にかかわらず、如何なるものにも適用することが出来るし、また質問の意味を明確に回答者に伝達し、曖昧な回答は適当な質問を追加することによつて確かめることが出来る。更に、どんな回答が得られるかだけでなく、回答者は、それを、どんな表情や態度で答えたかをも知ることが出来る。また、如何に匿名の質問紙であつても複雑な感情、動機、行動、またはタブーな事柄等は、多くの人々が、分り易くしかも充分に長々と書き表すとは、期待出来るものではない。精神分析学者や、でなくともすぐれた面接員は、通常、人が誰にも云わない情報でも充分引出し得ることを想起する必要がある。

しかし、社会調査における面接の問題は、本研究の主題に密接に関連されているとはいへ、一つの別個の大問題を形

成するものとして、紙数の都合上、後の機会に譲ることにしたい。ただこれに関連して、ここで強調されねばならないことは、調査トピックの選定を経て仮説の形成から質問項目の選定、及びその言葉使いの決定、回答の形式、更に調査結果の解釈や誤差の検討に、柔軟性に富むインテンシヴな面接は欠くべからざるものであるということである。この種の面接が、どんな質問が問われ、また質問を如何に作成したらよいかを充分に知り得ない分野の開発に、すぐれた効果を生むことは既に第二章で指摘されている。P. Lazarfeld は、ポール・タイプ質問を用いるに先だつて、よりフリーなインテンシヴな面接によつて、母集団の一部に予備調査を行い、問題の核心を発見することの必要を説くとともに、また、たとえその調査が面接によつて行われたとしても、調査後、更にかかる面接によつて、重要と考えられる諸項目について、更に深く探究することが願わしいとしている。⁽¹⁾ 何れにせよ、こうしたインテンシヴな面接は、調査者の計画や考えと現実とを有効に結びつける最も確実な絆であり、更に積極的な意味では、新しい問題の発見と科学の発展との一つの推進力となり得るものである。それは、社会調査の前と後に常に常に存すべきものである。

以上においてわれわれは、回答誤差が如何に多く存するものであるかということから始めて、それが何故、どのようなして生ずるかを探究し、その処理方法を、いわば社会調査の基本過程といえる、調査票の作成の問題について明らかにし得たと思う。社会調査の根本目標は、ひたすら正確なデータの蒐集にあり、行われた調査に、どのような誤差が存在しどのようなようにしてそれが生じたかを見究めることは、その調査がとりあげた研究問題の解明と、勝るとも劣らず重要であることを最後に指摘したい。

(1) Albert Ellis, "Questionnaire Versus Interview Methods in The Study of Human Love Relationships" in *American Sociological Review*, 1947, Oct., pp. 541-553.

(2) Helen Metzner & Floyd Mann, "A Limited Comparison of Two Methods of Data Collection: Alternative Question-

- naire and the Open-end Interview" in *American Sociological Review*, 1952, Aug., pp. 486-91.
- (3) Herbert H. Hyman, "Interview in Social Research" pp. 141-43.
- (4) Ellis op. cit., p. 541.
- (5) Metzner & Mann, op. cit., p. 487, p. 489.
- (6) Hyman, op. cit., pp. 142-43.
- (7) *ibid.*, p. 143.
- (8) Jahoda, Duetsch & Cook, op. cit., p. 159.
- (9) H. A. Edgerton, S. H. Britt & R. D. Norman, "Objective Differences Among Various Types of Respondents to A Mailed Questionnaire" in *American Sociological Review*, 1947, Aug., p. 436
- (10) *ibid.*, pp. 436-37.
- (11) *ibid.*, pp. 438-44.
- (12) Jahoda, Duetsch & Cook, op. cit., p. 139.
- (13) Hyman, op. cit., p. 139.
- (14) Jahoda, Duetsch & Cook, op. cit., p. 158.
- (15) Metzner & Mann, op. cit., p. 490.
- (16) Hyman, op. cit., p. 139.
- (17) Jahoda, Duetsch & Cook, op. cit., p. 172.